12月30日の「聖家族の日」のミサ。左から本間神父、成田神父、ウォンド神父、バンビ神父

「聖家族の日」　12月30日(日)

◆ウォンド神父の説教

ある日、若い神父が、司教に悩みを打ち明けました。
「ミサで説教するとき、聴衆が僕の話を聞いてくれないんです」と。
すると司教は、「あっとびっくりするようなことから話せばいいんです」とアドバイスしました。
「例えばどんなことでしょう?」と神父が尋ねると、司教は、「そうだなぁ…例えば、私は恋に落ちています。相手は、すでに結婚している女性で…彼女の名前はマリアです」とか。
次の日曜日、神父はこのように説教を始めました。
「司教は恋に落ちているそうです。それも、すでに結婚している女性と」。
そして、恥ずかしそうに、少し間を置いて。
「あ…でも、彼女の名前は忘れてしまいました」といいました。(ここは笑うところです。)

皆さんならご存知と思いますが、この女性、マリアが結婚している相手とは、ヨセフのことですよね。
今日(12月30日)は「聖家族の日」です。私はこの日が大好きです。
「聖家族」とは、マリアとヨセフ、それにイエスの3人のことをいいます。
福音書の中では、イエスが12歳のときに、3人が過ぎ越しの祭りのためにナザレからエルサレムに向かうときのことが書かれています。すると、旅の途中でイエスの行方がわからなくなり、ヨセフとマリアがイエスを必死に探します。私は、同じように自分の子どもの行方がわからなくなった家族と向き合ってきました。わが子が逃げたのか、それとも、誘拐されたのか?どこかで命を落としているのではとか?その答えが、何年もわからずに時が過ぎていくこともあります。
でも、イエスは、両親にわざとそのような苦労を味あわせたようでした。

両親がイエスを見つけると、神殿で教師たちと一緒にいました。その時、マリアは、しかりつけるのではなく、優しく、「何故このようなことをしたのですか」と理由を尋ねました。このマリアがとった行動を、親は見習わなければならないと思います。子どもには、やったことに理由があるはずですから、その理由をまず尋ねることが大切です。

一方、マリアではなく、イエスがとった行動にも注目してもらいたいです。
教皇ベネディクト16世の著書には、聖家族では、「自由と服従が、バランスよくとられていた」と説明しています。教皇は、12歳のイエスは、友達や同い年の子どもたちと自由に遊ぶことが許されていたとしています。そのイエスは、神殿で教師たちの話すことを聞いたり、質問をしながら、神様について学んでいたのです。
イエスは確かに、旅の途中で行方がわからなくなり、親を困らせましたが、ナザレに帰るときは、両親の言うことをききました。つまり、教皇が著書の中で書いているように、イエスは、まず、天の父に従い、その後、地上の父と母にも従っているんです。私たちの家族の中では、天の智hcいと、地上の父と母、両方に従順であることが一般的かもしれない。ただ、福音書では、そうでなく、イエスは、両親に逆らい、天の父に従っていたのです。
私たちは、よく従順でいろと言われます。
実の父と母にももちろんだけど、天の父がいることもわすれてはいけません。
神様が求めることは、時には、私たちの習慣や文化からはずれているかもしれませんが、神様の思いは私たちの考えをはるかに超えています。だから、私たちは天の父を信頼するべきなんです。
皆さんに質問です。もし今日、神様があなたに何かをするように求めたら従うことができますか。考えてみてください。

【通訳の風間郁乃さんの感想】
今回、通訳・翻訳することを通して、改めて感じたのは、国籍は違ったとしても、同じ神様を信じていれば、国境など越えてしまうということ。一方で、残念なことに、私たちの信仰というのは、暮らしている社会の文化や価値観に影響されることが多いように感じます。私自身がそうだから。でも、縛られる必要はないんだな。神様を信じて、正しいと思ったことや、感じたことを素直に表現していけばいいんだなと思います。2013年が始まりました。今年は、まず、神様に信頼し、神様に祈り、真実を追究する年にしたいと思います。